

# Map



- |               |                             |               |                          |
|---------------|-----------------------------|---------------|--------------------------|
| ① ヤマハ株式会社     | 〒430-8650 浜松市中央区中沢町10-1     | ② 株式会社河合楽器製作所 | 〒430-8665 浜松市中央区寺島町200   |
| ③ 東海楽器製造株式会社  | 〒430-0835 浜松市中央区遠州浜2-26-10  | ④ 昭和楽器製造株式会社  | 〒433-8122 浜松市中央区上島1-8-55 |
| ⑤ 東洋ピアノ製造株式会社 | 〒438-0202 磐田市高木1818         | ⑥ 株式会社鈴木楽器製作所 | 〒430-0852 浜松市中央区領家2-25-7 |
| ⑦ ローランド株式会社   | 〒431-1304 浜松市浜名区細江町中川2036-1 | ⑧ 株式会社三創楽器製作所 | 〒435-0041 浜松市中央区北島町789   |

## 浜松市内で開催される国際コンクール、音楽フェスティバルの一例

## 浜松国際ピアノコンクール

Hamamatsu International Piano Competition

国際音楽コンクール世界連盟に加盟している国際コンクールで、浜松市制80周年を記念して1991(平成3)年から3年に1度、浜松市のアクトシティ浜松を会場として開催。若手ピアニストの育成を図るとともに、楽器のまちから音楽の都に向かう浜松市の代表的イベント。

## 静岡国際オペラコンクール

Mt. Fuji International Opera Competition of Shizuoka

静岡県が主催し国際音楽コンクール世界連盟に加盟している声楽オペラの国際コンクールで、1996(平成8)年の三浦環没後50周年を記念して始まり、その後もアクトシティ浜松を会場として3年に1度、開催されている。

ハママツ・ジャズ・ウィーク

浜松市が推進する「音楽のまちづくり」事業の一環として、「まちの中に音楽があり、音楽がまちをつくり出す」ことを目指して世代を問わず楽しめる「ジャズ」をテーマに、官民一体となって企画運営するユニークなイベント。1992(平成4)年より毎年秋に数日間にわたって市内各所で開催。

浜松吹奏楽大会／全日本高等学校選抜吹奏楽大会、  
全国中学生交流コンサート

生徒並びに指導者の交流を目的に1989(平成元)年から毎年3月の第4週金曜日から日曜日の3日間にわたって開催され、アクティビティ浜松を会場としている。全日本高等学校選抜吹奏楽大会前日にはJR浜松駅前北口広場「キタラ」でプロムナードコンサートが開催される。

## やрмаいかミュージックフェスティバル in はままつ

通称「やらフェス」は、音楽のまち・浜松を盛り上げる市民主体の音楽祭。毎年10月第2土・日曜日にジャンル、楽器、年齢、国籍、プロ・アマを問わないで世界や全国から集まった出演者が浜松中心部の屋内外で多数のステージを繰り広げる「だれもが楽しめる音楽祭」。



「やらフェス」実行委員会提供



静岡県楽器製造協会

Shizuoka Musical Instruments Manufacturers Association

〒430-8650 浜松市中央区中沢町10-1 ヤマハ株式会社ピアノ事業部(内)

2023年1月(初版)発行  
2023年3月(2版)発行  
2024年1月(3版)発行  
2025年9月(4版)発行

# 第4版

地場の楽器産業創成期と会員8社の創業者伝

音楽のまち、  
浜松の原点



**KAWAI**



# Shōwa



A P O L L O



*SANSO*



静岡県楽器製造協会

Shizuoka Musical Instruments Manufacturers Association



# なぜ浜松は “楽器のまち”に なったのでしょうか？

輝く浜松アクトタワーのもとで3年に1度開催される浜松国際ピアノコンクール。

駅前に響く市民の演奏や歌声。世界に誇る所蔵品を備える浜松市楽器博物館。

さまざまなかたちで人々が音楽に親しみ、音楽文化を発信して“音楽のまち”として成長してきた浜松は、人々が音楽の豊かさや楽しさを求めて集まる“音楽の都”をめざして、さらなる前進を続けています。

明治の初め、浜松で一人の職人がオルガン製造を見事成功させ、ここから浜松の楽器産業が始まります。

彼は優秀な弟子たちの育成にも努め、その成果は、多くの楽器製造販売会社の誕生へとつながります。

浜松は“楽器のまち”と呼ばれるようになり、そして、“音楽のまち”、“音楽の都”へ。

浜松に蒔かれた音楽の種は、成長を続けています。

静岡県楽器製造協会の会員8社は創業者たちの熱い想いを受け継いで心を込めて楽器づくりを続けています。

浜松の楽器産業創成の心躍る物語と会員各社の創業の原点をご紹介します。

## 静岡県楽器製造協会について

静岡県楽器製造協会は1951(昭和26)年、会員相互の連携と親和を図るとともに、楽器産業の向上発展に寄与することを目的として、日本楽器(現ヤマハ)、河合楽器、東海楽器、昭和楽器の他14社でスタートしました。これまでには、楽器に対する物品税の減免と撤廃運動、楽器分野へのJISマーク表示制度の活用、国内外の楽器市場視察、産業フェアや楽器フェア等へ出展などの活動を行って参りました。近年では、「音楽の都」に向けて挑戦を続ける浜松市との連携を深め、共同でオンラインイベントに参画するなど、地域の楽器産業の振興を図っています。

会 員	■ ヤマハ株式会社	■ 株式会社河合楽器製作所
	■ 東海楽器製造株式会社	■ 昭和楽器製造株式会社
	■ 東洋ピアノ製造株式会社	■ 株式会社鈴木楽器製作所
	■ ローランド株式会社	■ 株式会社三創楽器製作所
		(創業年順)



YouTube公式チャンネル

<https://www.youtube.com/@shizuseikyo>

ハーモニカのような外観をしている浜松アクトタワー(高さ212.77m、地上45階建)

浜松の楽器産業創成期

“楽器のまち”が花開くまで

## 西洋音楽事始め

# 西洋音楽が日本にやってきた

## 戦国時代：ザビエルが伝えたキリシタン音楽

日本の西洋音楽の歴史は、戦国時代に遡ります。1549(天文18)年、キリスト教布教のために鹿児島にやって来た宣教師フランシスコ・ザビエルは、「グレゴリオ聖歌」と呼ばれるキリシタン音楽も伝えました。これが日本と西洋音楽の初めての出会いといわれています。ザビエルは周防の守護大名・大内義隆<sup>おおうちよしたか</sup>へ望遠鏡、置時計、眼鏡などとともにクラヴィコードを献上しており、これが日本へ伝来した最初の鍵盤楽器とされています。

## 江戸時代：シーボルトが残した最古のピアノ



シーボルトのピアノ／「◎(公財)熊谷美術館」

江戸時代後期の1823(文政6)年7月6日、ドイツ人の医師シーボルトが、長崎出島のオランダ商館医として来日。この時に携えてきたイギリス製のスクエアピアノが、日本に現存する最古のピアノです。このピアノはシーボルトが帰国する際に、親交のあった長州萩藩(現在の山口県萩市)の豪商・熊谷<sup>くまや</sup>五右衛門義比<sup>ごえもんよしかず</sup>に贈り、その後、熊谷家の土蔵で保管されていました。現在は、この7月6日は「ピアノの日」として記念されています。

## 幕末：ペリーとともに洋楽事始め

1853(嘉永6)年、アメリカからペリー提督が4隻の黒船を率いて浦賀沖にやってきます。翌年再び来たペリーは3月8日、軍楽隊の演奏とともに横浜に上陸。この日、横浜に初めて西洋楽器の音が響き渡りました。開国に伴って、ラッパや鼓笛の合図で機敏に動く西洋式軍隊を見た幕府や諸藩は、兵制を見直し、洋式軍隊の新設に取り組み、まずは篠笛<sup>しのぶえ</sup>とスネアドラムで編成した鼓笛隊を誕生させます。これが我が国の西洋音楽事始めとなりました。



ペリー提督・将兵上陸の図／横浜開港資料館蔵



ペリーの軍楽隊が持ち込んだ西洋楽器「米艦渡来記念」図より／横浜開港資料館蔵

※ Web掲載許諾の関係上、図版にマスク処理をしています。

### 【3～7頁の参考文献】

三浦啓市『昭憲皇后のピアノ』2023年／三浦啓市『「地の塩」とならむ 川上嘉市翁の一生録』2022年／田中智晃『ピアノの日本史』2021年／井上さつき『ピアノの近代史』2020年／小粥章司『山葉の木蔭』2019年／長井進之介『OHASHI いい音をいつまでも』2019年／株式会社河合楽器製作所『輝け、世界へ。河合楽器製作所90年の歩み』2017年／公益財団法人静岡県文化財団『浜松ピアノ物語』2015年／榎郁太郎『サンプルのない時代』2014年／三浦啓市『ヤマハ草創譜』2012年／社史で見る日本経済史第53巻『日本楽器製造株式会社の現況／山葉寅楠翁／山葉の繁り』2011年／横浜市歴史博物館『横浜風琴洋琴ものがたり』2004年／前間孝則・岩野裕一『日本のピアノ100年』2001年／桧山陸郎『楽器産業』1990年／ヤマハ株式会社『ヤマハ100年史』1987年／桧山陸郎『洋琴ピアノものがたり』1986年／御手洗清『遠州偉人伝第一巻』1962年



# 「音楽のまち」誕生のバックボーン

## 浜松楽器産業前史

### 「ものづくりのまち」のルーツは徳川家康公



「徳川家康公立体しかり像」／  
原作品は徳川美術館所蔵・浜松市博物館提供

では今度は、浜松にフォーカスして、楽器産業誕生のバックボーンを探ってみましょう。

浜松は「ものづくりのまち」と言われますが、なぜでしょう？その背景をたどると、徳川家康にまで行き着きます。1570(元亀元)年、天下を目指す家康は武田信玄の侵攻に備え、三方原台地の東南端に浜松城を築城します。そして城下町を整えるために、各地からさまざまな技術を持った職人を集めました。彼らの住みついた場所には「大工町」「鍛冶町」などの町名が残っています。こうして浜松には江戸時代から「ものづくり」を担う職人がそろい、「楽器のまち」への人的条件が整うことになったのです。

### 場所も気候も楽器づくりに最適

浜松は東京と大阪の真ん中に位置するため、物流の便も良く、人の交流も盛んです。そのため、さまざまな職種の腕のいい職人や、情報、物品の流入に恵まれ、ものづくりに適した場所なのでした。そして、晴天が多い温暖な気候は、住みよだけでなく、楽器づくりにもプラスになりました。今のような温度・湿度を管理できるシステムがなかった時代、浜松の気候はオルガン、ピアノに使う木材の保管や加工に適していたのです。



浜松まつり「風合戦」／浜松まつり会館提供

### 「やらまいか精神」が原動力！

そして、そんな好条件を後押しするのが浜松の「やらまいか精神」です。「やらまいか」とは遠州地方の方言で、「やってみようじゃないか!」という意味。「何事にも挑戦してみよう!」という、ポジティブパワーあふれる精神風土が起業家を生み、起業家の活動を支援する気風を育てたのです。そして、東海道の真ん中で人の往来の多い浜松は、他郷の出身者を受け入れる開放性があるため、多彩な人々が次々に起業し、多くの企業が誕生。ヤマハ、カワイ、ホンダ、スズキなど世界的企業へと成長していきました。

## 浜松の楽器産業の誕生

# それは1台のオルガンから始まった

### 明治時代、求められた国産オルガン・ピアノ

1872(明治5)年、明治政府は学制を發布。小学校教科に「唱歌」、中学校教科に「奏楽」が取り入れられ、学校での音楽教育が始まりました。しかし、当時の日本には西洋音楽を教えられる人材も教材も楽器もありませんでしたので、政府は1879(明治12)年に音楽取調掛(現在の東京藝術大学)を設置。文部省の伊澤修二が初代担当官となって音楽教育実施のための調査研究に当たりました。そして、教材の作成や教員の育成を行い、唱歌教育には風琴(オルガン)、洋琴(ピアノ)を推奨しましたが、どちらも高価な舶来品しかなく、全国の学校に設置するのは困難な状況。廉価で良品の国産オルガン、ピアノの誕生が期待されました。



蝶々「幼稚園唱歌集」・1887(明治20)年発行より  
／横浜市歴史博物館蔵

### 山葉寅楠が浜松にやってきた

そこに登場したのが、山葉寅楠です。1851(嘉永4)年、紀州(現在の和歌山県)藩士の次男として生まれた寅楠は、明治の幕開けとともに実業を志します。彼は時計製造や医療機器の修理販売を学んだ後、大阪の医療機器店・河内屋を拠点に全国の病院に出向く渡り職人になりました。その頃、浜松では浜松病院の院長・福島豊策が常駐できる医療機器修理工の派遣を河内屋に要請。選ばれて浜松にやってきたのが寅楠だったのです。1881(明治14)年、寅楠30歳のときです。



若き日の山葉寅楠

### 「舶来品に遜色なし」の国産オルガン完成

浜松にきた寅楠は、仕事の合間に舶来オルガンに出会って興味を持ち、研究します。1886(明治19)年、元城に浜松尋常小学校が誕生。1887(明治20)年4月には唱歌科が取り入れられ、米国製リードオルガンが導入されました。しかし、このオルガンが2ヵ月半ほどで故障し、寅楠が修理を依頼されます。寅楠は医療器具修理を手伝ってもらっていた鋳職人の河合喜三郎とともにこのオルガンを修理し、これをきっかけに浜松の楽器産業が始まった——と言われていましたが、近年の研究によると寅楠のオルガン製造は1885(明治18)年頃から始まっていたとする説



現存する最古の山葉オルガン／  
ヤマハ(株)所蔵

もあります。最初の試作品を喜三郎と二人で音楽取調掛に持ち込んだところ、調律不備なため不合格。そこで寅楠は音楽取調掛で音楽理論と調律を学んで浜松に帰り、2台目を製作。再度持ち込んだところ、音楽取調掛の伊澤修二より「舶来品に遜色なし」と太鼓判をもらい、ついに国産のオルガンが完成したのです。



1885(明治18)年オルガン製造開始を示す「緑綬褒章状」  
／山葉浩伸氏蔵



# 国内外の博覧会にオルガンやピアノを出品

## 浜松の楽器産業の発展

### 国内で最高位獲得、海外で国産楽器初受賞の快挙

1889(明治22)年、山葉寅楠は合資会社山葉風琴製造所<sup>やまはふうきんせいぞうじょ</sup>を設立し、80人以上の従業員を擁してオルガン製造に進出しました。オルガン製造は全国で盛んになり、上野で開かれた1890(明治23)年の第三回内国勸業博覧会には、全国各地から計29台のオルガンが出品されました。その中で山葉オルガンは最高位の二等有功賞を受賞。並みいる全国の製造業者の中で優位に立ちました。この博覧会にピアノも出品して三等有功賞を受賞しています。寅楠は1897(明治30)



1903(明治36)年昭憲皇太后陛下御買上の山葉 横(グランド)ピアノ

年になると、日本楽器製造株式会社を設立。1902(明治35)年に、グランドピアノも完成します。1904(明治37)年には、アメリカのセントルイス市で開かれた万国博覧会にグランドピアノとオルガンを出品。いずれも名誉銀牌を受賞しました。これは国産の楽器が初めて海外で賞を



二等有功賞メダル



セントルイス万博・名誉銀牌

授かる快挙となりました。

### 河合小市が国産初のピアノアクション完成

河合小市<sup>かわいこいち</sup>は、1896(明治29)年、11歳の時に山葉寅楠のもとに弟子入りし、12歳にして研究室長的な存在になるなど、手先の器用さと頭脳のひらめきに長け、天賦の創造性を発揮。1899

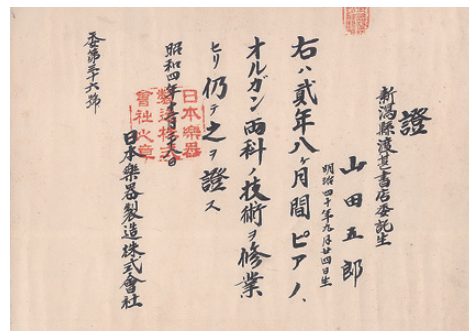


山葉オリジナルアクション

(明治32)年、寅楠がアメリカへピアノづくりの視察に出かける際、小市にピアノアクション(鍵盤を打つ力を弦に伝える装置)の完成を託します。5ヶ月後、寅楠が帰国したときピアノアクションは見事完成していました。この時、小市はまだ13歳。まさに「発明小市」の本領発揮といえる快挙でした。そして1900(明治33)年、日本楽器はピアノの心臓部と言える響板の製造にも成功。部品から外装までのほとんどを自社で生産したアップライトピアノが誕生したのです。

### 楽器産業を支える寅楠の技術者養成

寅楠は、1906(明治39)年にはオルガン、ピアノの組立、調律、整音などの技術者の養成を目的に、小学校卒業したばかりの少年を採用し育成する見習生制度を設けました。寅楠が手塩にかけて育て上げた山葉直吉<sup>やまはなおきち</sup>(後に山葉ピアノ研究所創立)や河合小市(河合楽器研究所創立)らを教師に徒弟方式で技術を習得させたほか、師範学校レベルの一般教養も身に付けさせました。寅楠の残した大きな功績の一つが、この技術者養成にあり、次第に見習生に留まらず特約店社員なども受け入れて委託生として育てていきます。ここで習得した技術は後継者に託され、後継者もまた次世代へと継承してきたことで、時代を超えて多くの人材が育ち、浜松の楽器産業は支え続けられています。



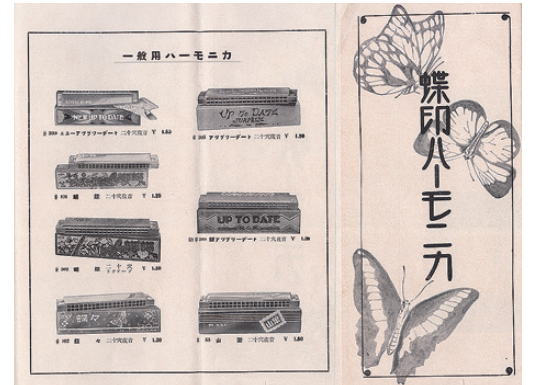
委託生技術修業証

# オルガン、ピアノからハーモニカ、電子楽器まで

## 浜松は一大楽器産業都市へ

### 大正～昭和・ハーモニカの隆盛

ハーモニカは大正から昭和初期には庶民の手軽な楽器として親しまれ、学生などを中心にハーモニカバンドが隆盛しました。日本市場はドイツ製がほぼ独占していましたが、1915(大正4)年、日本楽器<sup>ちようじるし</sup>は蝶印(バタフライ)と銘打ったハーモニカの製造に着手。第1次世界大戦によってドイツ製ハーモニカの輸入が途絶えたことから、蝶印ハーモニカは国内で飛躍的に販売を伸ばしたのみならず、ドイツの得意先だった海外にも進出しました。こうしてオルガン、ピアノ以外の楽器製造も展開していったのです。



蝶印ハーモニカ・カタログ

### 小市、河合楽器研究所創立

1916(大正5)年に寅楠が逝去。1926(大正15)年には日本楽器で大きな労働争議が勃発。河合小市は、この年に30年間働いてきた日本楽器を退職し、翌1927(昭和2)年、彼を追ってきた仲間たちとともに「河合楽器研究所」を創立。同年にはカワイピアノ第1号となるアップライトピアノ「昭和型」を世に送り出しました。「昭和型」は64鍵盤の小型ピアノながらもピアノとしての基本性能をすべて備えており、たちまち評判を呼び学校をはじめ広く普及しました。この成果を踏まえ、1928(昭和3)年には標準型のアップライトピアノ「堅型A号」を、続いてグランドピアノ第1号「平台一号」を発売しました。1930(昭和5)年には、小型オルガンを発売、国内だけでなく海外からも引き合いがありました。



小市と仲間たち



カワイピアノ第1号「昭和型」

### 戦後の音楽教育とともに楽器産業が発展

日本楽器は、シロフォンや木琴、家具の製造も進めます。河合楽器も1934(昭和9)年にはハーモニカの製造を開始。浜松はオルガン、ピアノの街から楽器産業の街へ進化します。戦時中は高い木工技術が評価されて軍用プロペラなどの製造を担い、会社存続の危機を回避。戦後は、高度成長時代とベビーブームに後押しされて、浜松とその周辺には100以上のピアノ製造とその関連メーカーがひしめきました。そして、学校の音楽教育に器楽が導入されたことで、浜松の楽器産業は飛躍的に発展。ハーモニカ、鍵盤ハーモニカ、リコーダー、アコーディオン、木琴、オルガン、電子楽器など、学校で使われる楽器のほとんどが浜松地域で製造されました。寅楠、小市とともに楽器づくりに取り組んだ職人たちの技術は継承され、さまざまな楽器製造販売会社が花開き、浜松を「音楽のまち」へと育てていったのです。



やまは とらくす  
山葉寅楠



1887年  
(明治20年)  
創業

## 浜松に楽器産業を もたらした寅楠

ヤマハ株式会社のブランドは、創業者・山葉寅楠の姓に由来します。

父が紀州徳川藩士で天文係をしていたことから科学技術に親しんでいた寅楠は、大阪で当時普及の兆しを見せていた時計づくりを学び、のちに医療機器の修理を手がけるようになり、浜松の病院を訪れます。

1887(明治20)年、浜松の小学校のオルガンが突然鳴らなくなりました。困った校長は病院に来ていた寅楠の話聞き、修理を依頼しました。

寅楠は難なく修理し、オルガン作りの可能性と必要性を確信しました。

早速、河合喜三郎という職人とオルガンを試作し、音楽教育の研究機関である東京の音楽取調掛で審査を受けました。この試作品は「オルガンの形はよいが、調律が不正確で使用にたえない」と酷評されましたが、寅楠は調律と音楽の理論を一から学び、悪戦苦闘を繰り返しながらオルガンを完成させました。これが「ヤマハ」誕生の第一歩でした。

寅楠は、学校にオルガンを普及させることをめざし、東西の学校教科書販売を通じて販路を開拓し、国内外の博覧会で認められていきました。

1897(明治30)年「日本楽器製造株式会社」を設立し、1900(明治33)年にはアップライトピアノ、翌々年にはグランドピアノの生産をはじめました。同時に優秀な技術者を集めて育てることに力を注ぎました。

寅楠が築いた人材の育成と開拓者精神は継承され、その後の発展への礎となりました。



と校學小城元松演現  
ンガルオしせとルデモが氏葉山に初最  
(る異々箱と型原め爲しせ施を繕修同數年後)



1898(明治31)年、板屋町に建設された工場

沿革 1887(明治20)年 創業  
1897(明治30)年 日本楽器製造株式会社設立  
1987(昭和62)年 ヤマハ株式会社に社名変更

主要事業 楽器事業：ピアノ、電子楽器、管・弦・打楽器等の製造販売等  
音響機器事業：オーディオ、業務用音響機器、情報通信機器等の製造販売  
その他事業：電子部品事業、自動車用内装部品事業、FA機器事業、ゴルフ用品事業、リゾート事業

## ヤマハ株式会社

〒430-8650 浜松市中央区中沢町10-1

各情報はこちらの二次元コードから



かわい こいち  
河合小市



1927年  
(昭和2年)  
創業

## 天才技術者、小市の矜持

1927(昭和2)年、河合楽器製作所の創業者・河合小市が仲間と共に創設した「河合楽器研究所」。そこには「ピアノづくりにかける熱い想い」という大きな信念がありました。

当時、庶民には手が出なかったピアノのイメージを覆す、廉価を追求するも性能には妥協をしない姿勢、それはまさに天才技術者としての小市の矜持でした。そして「研究所」と命名したのも、理想のピアノを目指す飽くなき技術研究に執念を燃やす小市の気持ちが入められています。

また、「多くの人にピアノを届けたい」という小市の願いは、技術の向上が決して技術者の満足のためではなく、美しい音を耳にした時の感動を、世界中のお客様にお届けしたいという小市の切なる思いそのものです。

「発明小市」は、その異名どおりにピアノアクションやピアノ響板、ハーモニカ・リードの取付装置など18件の特許、10件の実用新案を取得し、その発案力によって製作したピアノは、日本楽器在籍時代に引続き小市自身の手によって設計されました。こうした永年に亘る事業への功績が認められ1953(昭和28)年5月7日、小市に業界初の藍綬褒章が授与されました。その際、従業員に感謝を告げると共に、父のように慕った恩師・山葉寅楠翁の墓前に報告するなど、謝恩の心を生涯持ち続けました。

ストイックに“魂の音”を追求めた先に夢見た「この手で世界一のピアノをつくりたい」という小市の思いは、いま、世界の著名なピアノコンクールの会場で見事に実を結んでいます。



1929(昭和4)年頃の  
本社工場で



カワイグランドピアノ  
第1号「平台一号」

沿革 1927(昭和2)年 河合楽器研究所創立  
1929(昭和4)年 河合楽器製作所に改称  
1935(昭和10)年 合名会社河合楽器製作所に改組  
1951(昭和26)年 株式会社河合楽器製作所に改組

主要事業 楽器の製造・仕入ならびに販売。音楽教室・体育教室の運営。  
金属加工品および木工加工品の製造・仕入ならびに販売

## 株式会社 河合楽器製作所

〒430-8665 浜松市中央区寺島町200

各情報はこちらの二次元コードから





あだち へいひち  
足立 平七



士魂商才の  
創業者・足立平七

1947年(昭和22)年、創業者の足立平七がピアノとハーモニカの研究開発を目的として東海楽器研究所を創立。足立は浜松の足立楽器店の店主で「いつかはピアノを作りたい」との希望を抱いていました。

足立は“士魂商才”の典型のような人物で、明治生まれ特有の気概を秘めながらも、人生の機微について知り尽くし、経営の施策についても常に“愛語よく廻天の力あり”を信条としていました。また、楽器製造業界の在り方にも常に信念ある一家言を以て臨み、大敵なれど怖れず、小敵なれど侮らず、克く業界の中堅として円満な運営に功績がありました。

その後、1961(昭和36)年には、鍵盤ハーモニカ「ピアノニカ」を開発。教育用楽器として大ヒットさせました。1978(昭和53)年1月、足立の当初からの希望が叶い、シンメル社(ドイツ)のピアノを参考にしたアップライトピアノの製造を開始、3年後にはグランドピアノの製造も実現させています。現在は世界初のアルミ合金ボディを持つエレキギターなど個性的な商品で多くの若者から支持をあつめています。

創業から75年。時代と共に主力製品がピアノからギターへ変遷した今日も尚、挑戦を恐れず、新たな商機を模索し続ける創業者・足立平七の精神的遺産は脈々と生き続けています。



昭和25年新年式の集合写真



創業の頃の  
ハーモニカ

- 沿革 1947(昭和22)年 東海楽器研究所創立  
1948(昭和23)年 東海楽器製造株式会社設立
- 主要事業 エレクトリックギターの製造・販売および楽器・楽器関連商品の販売

東海楽器製造株式会社

〒430-0835 浜松市中央区遠州浜2-26-10

各情報はこちらの二次元コードから

会社HP



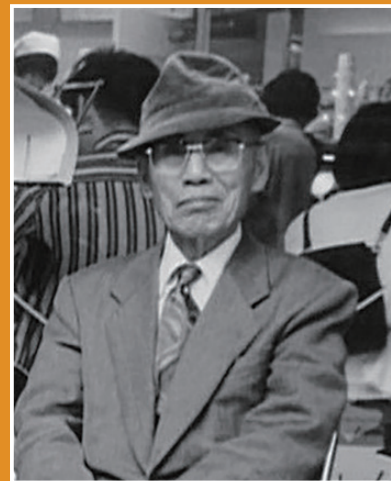
動画

はままつ 音のいろ／  
エレキギター



1947年  
(昭和22年)  
創業

すやま りくへい  
酢山 陸平



ポケットに入る  
音楽の歓び

銀行員から転身し、天竜工芸株式会社(現在はヤマハと合併)でハーモニカ職人の道を歩み始めていた酢山陸平は、戦後間もない1947年(昭和22)年、加藤茂一、神谷国一の2人の職人とともに独立し、浜松市砂山町にハーモニカ工場を立ち上げました。

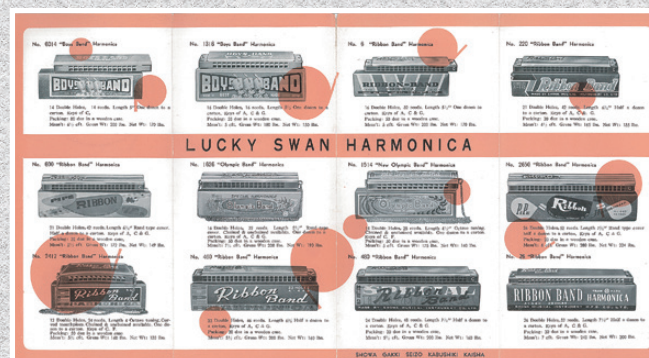
戦後まもなくの創業の頃は、戦争の傷を少しでも癒し、明るい希望をと願う人々にとって、ハーモニカの奏でる優しい音色は心に安らぎを与えてくれる娯楽の一つとして多くの人々に受け入れられ、ハーモニカは作れば売れるという状態で生産されていきました。

そして、ハーモニカの巨匠、宮田東峰氏監修による“スペシャルミヤタ”の大ヒット、同氏の“ミヤタ・バンド専属工場”としても注目されました。さらに、文部省の依頼により音楽教育の現場でハーモニカが使用されるようになったことで、黄金時代が続きました。創業以来の信条は品質向上一本やりで努力を重ね、1956(昭和31)年にJIS指定品になった時の感激と喜びをいつまでも忘れずに一層の精進を誓いあっていました。

“ハーモニカはポケットに入るオーケストラ”が昭和楽器のキャッチフレーズ。全て手作業で、手に取った人の笑顔を思い描きながら、今も職人が工房で一つ一つ丁寧に製作しています。



スペシャルミヤタ ハーモニカ



昔のカタログ

- 沿革 1947(昭和22)年 昭和楽器製造株式会社創立
- 主要事業 楽器製造(ハーモニカ)

昭和楽器製造株式会社

〒433-8122 浜松市中央区上島1-8-55

各情報はこちらの二次元コードから

会社HP



動画

はままつ 音のいろ／  
ミニハーモニカ





いしかわ たかみ  
石川 隆巳



1948年  
(昭和23年)  
創業

不撓不屈の技術者魂

東洋ピアノ製造の創業者・石川隆巳は1925(大正14)年に日本楽器(現ヤマハ)に入社し、山葉直吉、河合小市からピアノ製造技術を習得。その後、河合楽器研究所を立ち上げた河合小市に誘われて河合楽器で5年ほど就業した後、1934(昭和9)年、浜松市外白脇村楊子に三葉楽器製作所を創業しました。石川は強烈な技術者魂の持ち主であり、「ピアノ製造過程において自分の考え方を出す事に悩み、自分の持ち味を生かしたピアノを作るためには独立するしかない」と腹を括ってのことでした。

この会社は戦災により、1945(昭和20)年に解散しましたが、戦後の1947(昭和22)年、静岡県磐田郡掛塚町に東洋楽器製作所を設立。翌1948(昭和23)年には、浜松市北島町に東洋ピアノ製造を発足させました。根っからの技術者の石川は、経営面は副社長に任せ、技術の確立に全身全霊をかけて取り組み、自社ブランド「アポロピアノ」の基礎を作り上げたのです。ピアノ作り一筋の石川にしてみればピアノは生き物であり、自分の分身でもあるとして、さらなる技術開発に意欲を湧き立たせました。

その後の大量生産時代で中小メーカーが淘汰される中、東洋ピアノは堅実経営を続け、1970年代には音と品質が評価されて東京藝術大学・武蔵野音楽大学の指定業者に選ばれました。

今日ではグランドピアノに匹敵するアップライトピアノの打弦機構SSS(スリーエス)機構を開発し、世界で唯一のアクションがシフトするアップライトピアノを主力製品にするなど、創業以来の技術魂は脈々と生き続け、唯一無二のピアノをグローバルに発信しています。



アポロピアノ・カタログ



APOLLO NO.300 (1948年製)

沿革 1934(昭和9)年 三葉楽器製作所創立  
1947(昭和22)年 有限会社東洋楽器製作所設立  
1948(昭和23)年 東洋ピアノ製造株式会社設立

主要事業 ピアノの製造・販売、輸入ピアノ調整・販売、木工加工、塗装。

東洋ピアノ製造株式会社

〒438-0202 磐田市高木1818

各情報はこちらの二次元コードから

会社HP



動画

はままつ 音のいろ／  
アップライトピアノ



すずき まんじ  
鈴木 萬司



1953年  
(昭和28年)  
創業

オンリーワンの  
製品づくりを目指して

「ハーモニカを愛し、新しいことへの挑戦を恐れず、生涯、楽器づくりの現場が大好きな人物」これは、鈴木楽器製作所のホームページの中で鈴木萬司を評した言葉です。鈴木萬司という人の魅力を端的に伝えていると言えます。

萬司は1923(大正12)年、浜松市生まれ。15歳で河合楽器製作所に入社し、ハーモニカ製造に従事。海軍入隊を経て復職した後、1953(昭和28)年に独立。ハーモニカ製造業を開始し、翌1954(昭和29)年に鈴木楽器製作所を設立。当時、小学校の音楽の授業でハーモニカが使われている事に着目し、教育用モデルを学校向けに販売し会社を軌道に乗せます。しかし、先生方からハーモニカによる音階指導の難しさを聞き、1961(昭和36)年に個人持ちできる鍵盤楽器を目指し、国内初の鍵盤ハーモニカ「メロディオン」を開発・発売。1967(昭和42)年には文部省の「教材基準」に位置付けられ、全国の学校で使われるようになりました。同時期に大正琴の開発・販売に着手、全国に教室を展開しながら大正琴の爆発的人気を牽引。1980年代には時代に先駆け、教育用ソフトウェアを開発。また、アメリカ生まれの「ハモンドオルガン」の製造・販売を1980年代後半から開始し、一般市場へも本格的に参入していきます。

萬司は「何にでも興味を持つ人だった」と現会長の鈴木禮子はインタビューで語っています。そして社員には「自分の頭で考えて、何でもやってみろ」とよく話していたとのこと。その伸びやかなチャレンジ精神はしっかりと受け継がれ、鈴木楽器でしか作れないオンリーワンの製品づくりにつながっています。



国内初の鍵盤ハーモニカの広告



「メロディオン」初号機スーパー34

沿革 1953(昭和28)年 創業  
1954(昭和29)年 株式会社鈴木楽器製作所創立  
主要事業 楽器製造業(教育用楽器・ハーモニカ・ハモンドオルガン・大正琴)

株式会社 鈴木楽器製作所

〒430-0852 浜松市中央区領家2-25-7

各情報はこちらの二次元コードから

会社HP



動画

はままつ 音のいろ／  
クロマチック  
ハーモニカ





かけはし いくたろう  
梯 郁太郎



1972年  
(昭和47年)  
創業

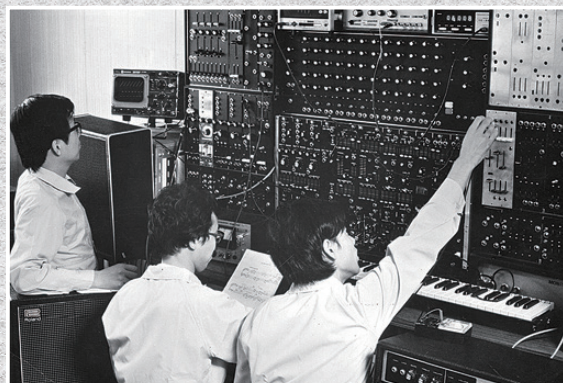
ライフワークの夢を  
浜松で実現

戦後間もない1940年代の末、独学で技術を学び宮崎県高千穂町で16歳から時計店を開業していた梯郁太郎は、時計の修理をしながら、いつもラジオで音楽を聴いていました。

20歳のとき、生まれ故郷の大阪に移住。しばらくして電器店を開業、同時に趣味で電子機器を試作していました。ある日、教会のオルガン修理の依頼を受けその音色に感動し「楽器を作りたい!」と思ったとき、彼の「ライフワークは音楽」がスタートしていました。

当時はオルガンが足踏み式から電動式に変わってきた時期。梯は「よし!電子楽器をライフワークにしよう」と製造業への進出を決め、1960(昭和35)年にエース電子工業を設立。1968(昭和43)年、生産拡大のため浜松の楽器工場を買取ったことから浜松と行き来が始まり、大阪と東京の間に位置し、清水港や名古屋港という輸出インフラも整った浜松の良さを実感。そこで、1972(昭和47)年、ローランド株式会社として大阪市で新たなスタートを切ったときも、浜松にも工場を置いて生産を始め、世界初のタッチ・センス付の電子ピアノやギター・シンセサイザーの発表など、次々と画期的な製品を世に送り出し、ローランドは世界的な電子楽器メーカーとして発展。1983(昭和58)年には電子楽器のデータの世界統一規格であるMIDIの制定に貢献し、その功績を称えられて2013(平成25)年にグラミー賞のテクニカル・アワードを受賞しています。

2005(平成17)年、ローランドは本社を浜松に移転しました。浜松の良さを見つけて、移転してライフワークを実現した梯。彼は「オープンで進取の気性を持つ浜松を選んだのは正解であった」と著書に記しています。



1976(昭和51)年頃の製品開発チーム



ローランド・シンセサイザー第1号モデル

沿革 1954(昭和29)年 カケハシ無線開業  
1960(昭和35)年 エース電子工業株式会社設立  
1972(昭和47)年 ローランド株式会社設立

主要事業 電子楽器、電子機器、およびそのソフトウェアの製造販売  
ならびに輸出入

ローランド株式会社

〒431-1304 浜松市浜名区細江町中川2036-1

各情報はこちらの二次元コードから

会社HP

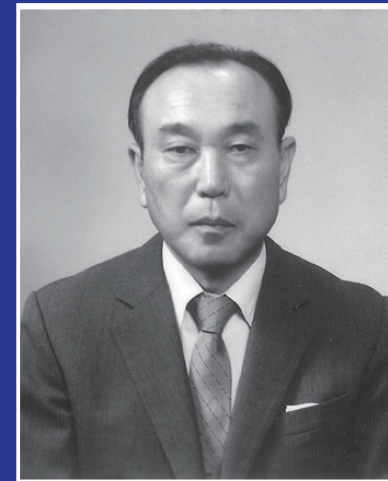


動画

はままつ 音のいろ／  
電子ピアノ



すずき つぐお  
鈴木 次雄



1985年  
(昭和60年)  
創業

古典楽器工房の  
三つの「創」

三創楽器製作所は1985(昭和60)年に東海楽器製造のチェンバロとバンジョー部門が独立し、三創工芸として設立されました。翌年よりパイプオルガンの製作も開始。

創業者の鈴木次雄が掲げた「三創」とは「人づくり」「ものづくり」「夢づくり」の三つの「創」であり、一番重要視している「楽器作りの職人を育てる」という精神は『技術を絶やさず未来へバトンを繋いでいくことがものづくりの原点である』という考えのもと、創業者の想いを継承し、今日に至っています。

チェンバロは鍵盤楽器の原点。当社のチェンバロは海外から取り寄せた古図面を参考に復刻。鉛筆1本で図面を描き、材料の選別から設計、1,000点以上あるパーツの加工、組み立てまで全て手作りで製作しています。1987(昭和62)年からは大正琴の製造も開始。「気軽にできる大衆的な楽器」というイメージのある大正琴の音楽性を芸術の域まで高めるべく、「優れた楽器としての大正琴」の確立を目指しました。

2013(平成25)年にはライアー(竖琴)を製作開始。ものづくりのまち・浜松ならではのマイスターの心は創業以来確実に伝承され、「喜び」を伝える逸品を生み出しています。



創業時の工場



アンリ・エムシュが1756年に製作した作品を  
モデルとしたフランス式2段チェンバロ

沿革 1985(昭和60)年 株式会社三創工芸 創立  
2008(平成20)年 株式会社三創楽器製作所 社名変更

主要事業 古楽器のチェンバロ、ライアー(竖琴)、大正琴などの  
楽器製造販売

株式会社三創楽器製作所

〒435-0041 浜松市中央区北島町789

各情報はこちらの二次元コードから

会社HP



動画

はままつ 音のいろ／  
チェンバロ

